

マレー半島におけるジャクンの親族名称

前 田 成 文

A Jakun Kinship Terminology

by

Narifumi MAEDA

1 調査のオリエンテーション

社会人類学では、親族組織の問題が、古くから研究の中心的な課題であり、理論的にも最も発展したと考えられているが、それでも種々の未解決の問題が残っている。最近の親族組織研究の傾向としては、(1)従来なおざりにされていた非単系血縁組織の研究から、新しい展望を親族組織研究に取り入れようとする傾向、(2)構造言語学などの影響を受けて、親族名称という体系に論理的完結性を求めようとする行き方、(3)計算機を使って、統計的処理によるモデルを設定しようとする傾向、(4)親族組織の意味と目的、ないしは機能を、現実の体系としてではなく、諸規則からなるモデルとして捕えようとする行き方、などが注目される。

本論¹⁾は、主に親族名称の内的な一貫性を中心とした記述であるが、筆者の意図するところは、親族組織を、婚姻規制、姻族間の近親性、親族名称の三つの側面から、全体として把握することである。

本論文のデータは、いわゆる原マレー人と称せられる、マレー半島南部に居住するジャクン²⁾のコミュニティの現地調査³⁾に基づくものである。彼らの社会が、母系制でも、父系制でもないことは、従来の乏しい資料からでも明らかであった。しかし、それでは、彼らの双系制の構造はいかなるものか、ということは不明であったので、本論では、その点を明らかにする。

- 1) これは、1966年10月27日の、東南アジア研究センター研究例会において報告したものを敷衍したものである。例会において、岩村忍、姫岡勤、泉井久之助、William Newell 諸教授から御教示を得たことを感謝する。
- 2) このジャクンという語は、マレー語として蔑称的な響を有し、できれば避けたいが、この人種グループを総称する適当なことばがないので、民族学・人類学文献で広く使われる語として、ジャクンを便宜的に採用する。なお、マラッカのある原住民をジャクンと称することもあるが、本論文でのジャクンというのは、そのような特定の小グループを指すものではないことを附言しておく。
- 3) 筆者の現地調査は、東南アジア研究センターのマレーシア・インドネシア地域研究計画の一環として、行なわれたものである。調査期間の1965年8月より1966年4月まで、ジョホール州エンダウ川流域の部落に定着して、同上計画のクダー (Kedah) 州アロール・ジャングス (Alor Janggus) の調査とも比較しながら、社会構造の研究が行なわれた。調査地の選定、調査の経過などについては、拙稿「マラヤの Aborigines」『東南アジア研究』第3巻第2号(1965)、124～128頁、および、「エンダウ川流域の Orang Hulu (Jakun) の家族覚え書」上掲誌第3巻第5号(1966)、156～160頁参照。

ジャクンの社会を概観すると、通例、イスラームを受容せず、比較的奥地に居住して、主として焼畑耕作に従事していることが特色である。もちろん、海岸部を占拠するマレー人ムスリムとの接触の頻繁な場合には、一概に、非ムスリムということと、焼畑耕作民であるという尺度によって、ジャクンをマレー人ムスリムから区別できないことも起りうる。その上、他の原住民、なかんずく、ジャクンの居住地のすぐ北方に住む Senoi 系の人種との混血もあって、周辺部のグループは、その人種的帰属が不明確な場合が多い。また、スランゴール(Selangor) 州の南西海岸部に住む Mah Meri と称されるグループのように、言語的には、Senoi 系に近いが、社会組織・生活様式などはジャクンと変わらない、といった例もある。ジャクンの分布は、主に、パハン(Pahang) 州南部、スランゴール、ヌグリ・スンビラン(Negeri Sembilan)、マラッカ (Melaka)、ジョホール (Johor) 各州の奥地にわたっている (Fig. 1 参照)。

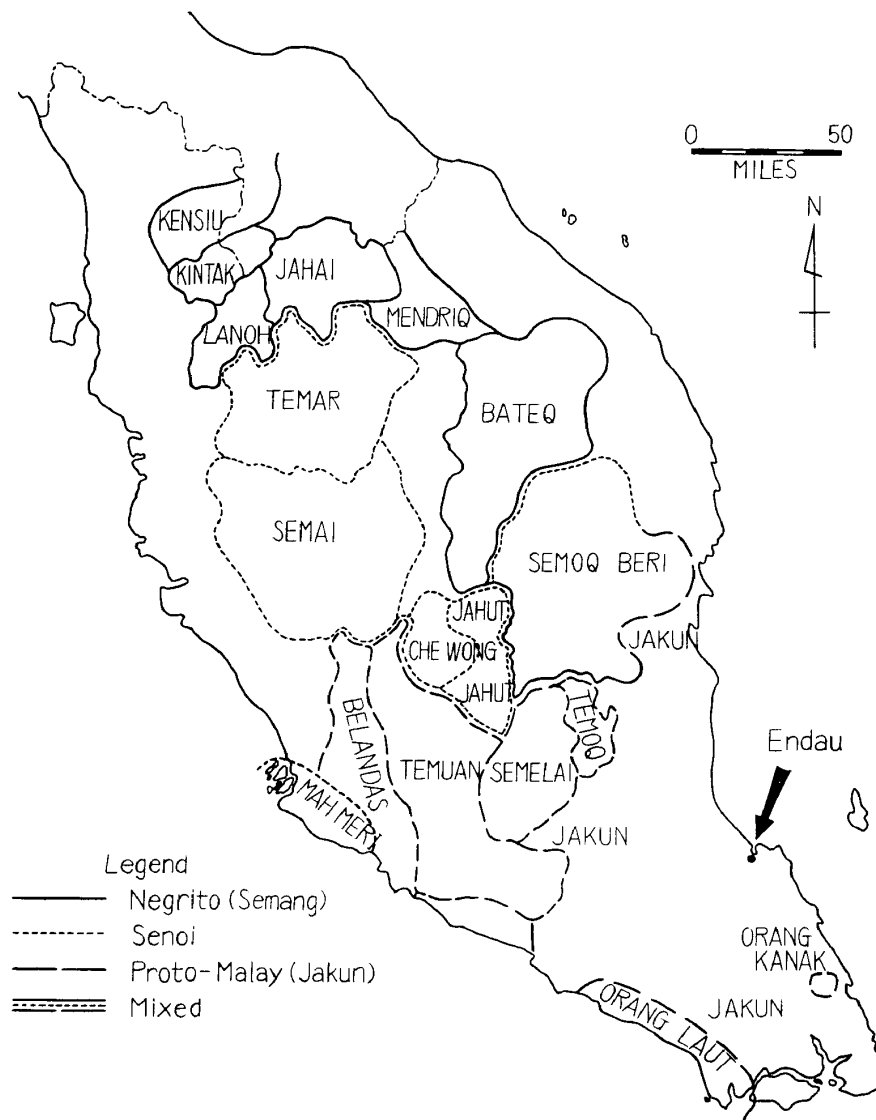


Fig. 1 Distribution of the Aborigines
(Based on the map made by the Department of Aborigines.)

筆者の調査した地域は、ジョホール州とパハン州との州境の一部をなす、エンダウ(Endau)川流域の、ジャクン・コミュニティである。Jakun Proper とも言われるグループに属するが、体質を外から見ただけでも、Senoi 系の血が混じっていることが明らかな個体が多い。また、中国人、マレー人との混血もかなりあるようである。しかしながら、総体的に外見だけでは、普通のマレー人と識別されない。

彼らのことばも、マレー人に対して、どの程度の接触交渉を持っているかによって異なるが、ほぼ、マレー語の方言といえるものを話す。ただ、アクセントやイントネーションが標準マレー語あるいはジョホール・マレー語に比べて、奇妙であり、比較的アラビア語系の影響を受けず、またサンスクリットの抽象語も身につけず、古層の言語を残しているようである。彼らのことばに慣れないマレー人が、彼らの話すのを聞いても、さっぱりわからないことが多い。⁴⁾ 逆に、彼らは、標準マレー語を自由に話し、聞き、かつ、方言の違う他のジャクンのグループとの共通語としても用いる。彼らが標準マレー語を使えるようになったのは、最近のことと言われ、ラジオの普及がその一因をなしていることは否めない。

2 エンダウ川とオラン・フルの部落

エンダウ川流域のジャクンは、自分達を指すのに、オラン・フル(Orang Hulu)と言い、他に特別な名称を持っているわけではない。⁵⁾ オランというのは「人」、フルというのは「川の上流の」「奥地の」「源の」とかいう意味である。このことばは、エンダウ川上流域の住民のみに限定せず、いわゆる奥地に住む原住民を漠然と指すこともある。以下、本論文では、オラン・フルと言った場合は、エンダウ・ジャクンを中心として、周辺域のジャクンをも含めた名称として、使用する。

エンダウ川は、ジョホールの中央山塊に源を発して、ゆるやかに蛇行しながら、下流部では、パハン・ロンピン・エンダウ(Pahang-Rompin-Endau)デルタ地域の一部を形成する。下流域には低湿地帯が多く、雨期には、洪水になることも多い。下流から上流に向って、景観は、紅樹林・湿地森林、淡水・湿地森林、低地デブテロカルプル森林、と変化していく。その合間に、焼畑のあとを示す、ララン(lalang, *Imperata cylindrica*)原、二次森林(ブルカール, belukar)が点々と存在している。森林資源としては、木材の外に、籐、ダマール、ジュルトン

4) マレー人の中でも、方言の差異が大きいので、しばしば意思の疎通を欠く場合がある。cf. C. C. Brown, *Studies in Country Malay*. London: Luzac & Comp., 1956.

5) 以下の文献に、エンダウ・ジャクンが、オラン・フルあるいはオラン・ウルと称せられている記事がある。J.R.Logan, "The Orang Binua of Johore," *Jour. of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Vol. 1 (1847), p. 246; H.W. Lake & H.J. Kelsall, "A Journey on the Sembrong River from Kuala Indau to Batu Pahat," *Jour. of the Straits Branch, Royal Asiatic Society*, No. 26 (1894), p. 13; A.D. Machado, "A Vocabulary of the Jakuns of Batu Pahat, Johore," *Jour. of the Straits Branch, Royal Asiatic Society*, No. 38 (1902), p. 30.

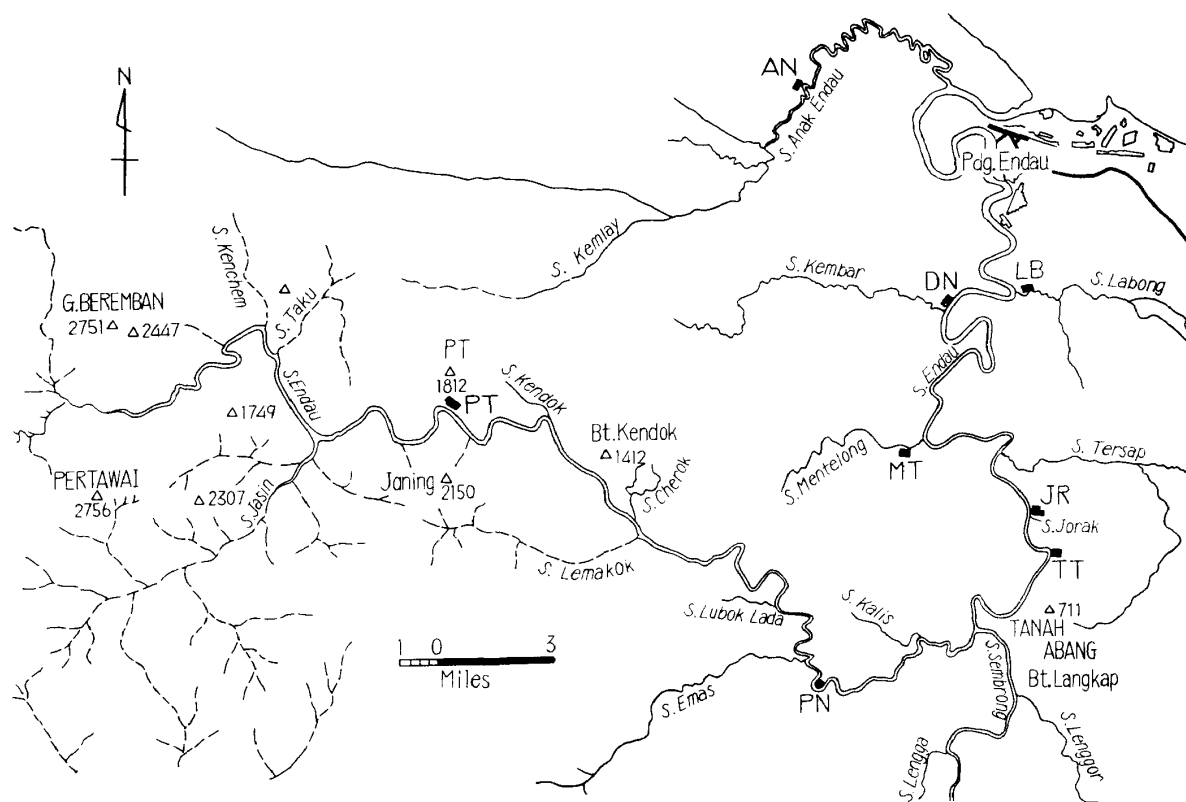


Fig. 2 Plan of the Endau River

(jelutong, *Dyera costulata*) などがある。食用可能な動植物も種類は豊富であるようである。ただし、採集経済への依存度は、現在では極めて低い。

焼畑栽培は、彼らの伝統的な栽培法である。焼畑には、米、キャッサバ、とうもろこし、粟を主として植える。その他、さとうきび、甘薯、バナナなどを栽培し、ドリアン、ジャック・フルーツなどの果樹も作る。この焼畑を行なうために、大体5～6年をサイクルとして、土地を替える。

しかし、彼らの経済生活は、西洋人が初めて、彼らの生活を観察した19世紀前半には、すでに、自給自足の生活ではなかった。すなわち、当時、行商するマレー人から、衣類、陶磁器（皿、水入れ）、鉄器具（山刀、斧、槍、鍋）、砂糖、ココ椰子、時には米、煙草、ガンビール（檳榔膏）、ビンロウ（檳榔子）、石灰（後3者は、キンマの葉と共に噛んで、嗜好品とする）などを得ている。これらの代わりに、マレー人の注文に応じて、籐、くすのき、びやくだん、種々の樹脂、ろう、グッタペルカなどをジャングルから集めて、マレー商人に引き渡す。⁶⁾

現在でも、このような交易によって、オラン・フルの生活は支えられている。変化した点といえば、(1)マレー人が後退して、中国人の材木業者、籐業者、鋤山業者が彼らの生活を支配す

6) J.R. Logan, *op cit.*, p. 262.

るようになったこと、(2)物々交換の形は無くなり、形式上、貨幣を媒体として、交易が行なわれるようになったこと、(3)生活必需品を購買品によって賄うことが益々多くなったこと、などがあげられる。現在、オラン・フルが主として依存する現金収入の道は、籐伐採によるものが、最も手軽で普遍的に行なわれている。この現金収入の量は、籐伐採に従事する労働時間の多少によって、各個人差と同時に、部落差が見られる。しかし、全体として見れば、籐伐採による収入は、これ以上増加することはない限度まできておりながら、それだけの収入では、到底最低生活を維持できず、伝統的な生活様式である焼畑栽培をせねばならぬ状態に余儀なく置かれて

Table 1 Households and Population by Hamlet 1965/66

Name of hamlet	Number of households	Persons over 12 years old		Persons under 12 years old		Total	Total population in 1962 ⁴
		M	F	M	F		
Peta ¹	20	26(11)	22(7)	18	19	85	107
Punan ¹	12	14(4)	17(7)	6	14	51	50
Tanjong Tuan ¹	13	19(8)	12(1)	13	19	63	89
Jorak ¹	33	41(13)	36(8)	24	27	128	51
Mentelong a. ²	14	18	21	9	11	59	—
Mentelong b. ²	14	17	14	25	22	78	—
Denai ²	13	15	17	17	23	72	—
Labong ³	32	42	37	37	39	155	128
Total	151	192	176	149	174	691	

Sources :

1. My Interview (April, 1966). (In each parenthesis is a number of unmarried persons.)
2. Data supplied from the Administrative Station of Mentelong (June, 1965).
3. Data supplied from the Helper in Endau (March, 1965).
4. Data supplied from the Department of Aborigines, Johor (1962).

いると言える。これは、むしろ籐業者の巧みな労働力統制によるものであると言う方が適当であるかも知れないが、本論文では、このことに関してこれ以上触れない。

オラン・フルの部落は、ジャングルを切り開いた川沿いの土地に、家を建て、そのぐらりに、畑、さらに焼畑地を作っている。一部落の人口は、50人から150人位の範囲である (Table 1 参照)。調査の

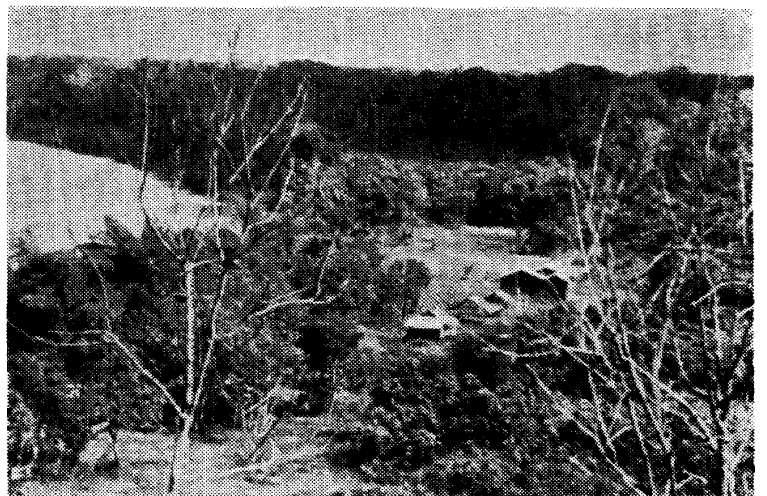


写真1 ジョラッ部落の一部

拠点として選んだジョラッ(Jarak)部落は、人口128人、33家族(Kelamin)が28軒の家に住んでおり、ジョラッ部落より上流では最大の部落である。筆者がインタビューを行なった上流4部落の人口構成は、人口絶対ピラミッドに見られるように、母体数が少ない割には、かなり均齊のとれたピラミッドと言える (Fig 3 参照)。ジョラッより下流域には、パハン州側のムントロン (Mentelong) 川に沿って、28家族139人、ドゥナイ (Denai) に13家族72人、ラボン (Labong) に32家族155人が住んでいる (Fig 2 参照)。

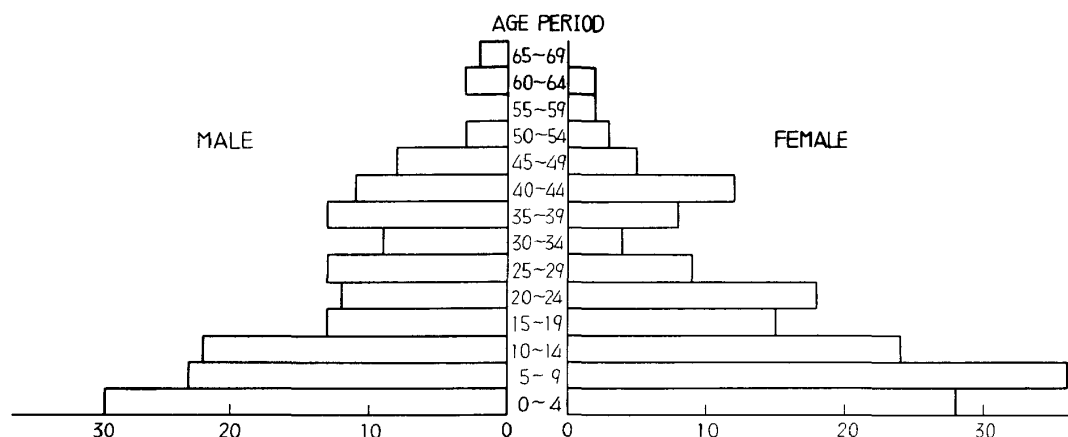


Fig. 3 Age and Sex Pyramid of Four Hamlets, 1966

各部落では、バティン (batin) と呼ばれる統率者が一人選ばれて、彼が村人間の紛争の決裁、諸行事の日取り決定と遂行、外部社会に対する窓口などの役割を果たしている。逸脱行為者に対する制裁は、慣習法によって、罰金の額を言いわすだけである。従って、実際には、バティンの説得力と、部落民の多数の支持とが無ければ、バティンの役目を遂行できない。部落の構成員が少数なのも、生態学的な条件のほかに、このようなルーズな統制関係によって構成員数が限定されているからにはほかならない。そして、諸部落の中でも、「かけひき」に巧みで、「機智」に富んだバティンの下には、比較的多くの人が集まり、影響力の弱いと見られたバティンの下には、人々が集まってこない。

部落間を結びつける連合組織というものは、存在していない。彼らの社会では、部落が最小の統治単位 (minimal government) であり、同時に、それ以上の大きさの土着の統治組織も有していない。部落内部の構成員は、普通、バティンを中心とする親戚関係によって、多かれ少なかれ結びつけられている。しかし、このことは、彼らの部落が排他的で、親戚でないものは、受けつけないというのでは決してなく、非常に開放的でさえある。たとえば、中国人がオラン・フルの社会に入っていくと、彼はオラン・フルとの結婚によって、他のオラン・フルとまったく同一視されるようになる。

一つの部落がバティンの統率のもとに良くまとまっているのは、部落が親類縁者から構成されているからだとするのは、誤まりであろう。むしろ、個人が独立生活を営めば、死へと追い

やられるしかない生活条件の中で、一つの集団として行動しなければならないという、経済的・社会的・環境的な要求が、人々をして結束させるのであって、親族組織はそのような結合を保持するための一つの考案物であり、人間の結合を親族関係によって、強化させているに過ぎない。従って、これを逆に見れば、親族組織にあらわれた関係を通して、この社会をより良く理解することができるとも言える。

3 親 族 名 称

親族組織の考察を行なうには、現地において、まず系譜関係をできるだけ集め、その系譜に基づいて、種々のつながりを想定する。そのつながりが、どのような「ことば」で表現され、どのような性質の「関係」なのであろうかをできる限り広範囲の人々から確かめて、一定のパターンを導き出す。これが第1段階である。ところが実際にオラン・フルの系譜作りにあたって、いわゆる樹枝型の系譜を想像していた筆者には、非常に困難なことがわかった。というのは、4部落の全世帯に対して、たどられるだけの親戚（主に尊属）の名前を聞き出していった時、まず曾祖父母の名前を知っているものは皆無、祖父母の名前を挙げたのもごくわずかで、父母の名前を言わない者もいるという有様である。同時に、彼らがテクノニミーを習慣としていることや、個人名（とくに尊属の名）を直接呼ぶことを忌避しようとする傾向が、この名前の記憶のあやふやさを助長している。彼らが、親族として、はっきり系譜上の関係を思い出せるのは、普通50人内外であり、それ以上は漠然とした（本人にはわからないが、とにかく、親類であるといった）間柄のものになる。本当の双系制原理(bilateralism)が、系統関係(descendant)ではなくて、親子関係(filiation)を基調とするものであるというのは、オラン・フルの社会でも正しい。⁸⁾ しかし同時に、オラン・フルの親族関係の次元が、遡行的であるよりも、前進的な関係、共時的な関係に重点が置かれていることに注目すべきである。⁹⁾ これは、親族名称における融合の法則(merging rule)、即ち、兄弟間、姉妹間の社会的同等の原則¹⁰⁾が表面に押し出されていることと、後に述べるテクノニミーの慣行等によって明らかであるといえる。

7) 祖父母にあたる親族名称が、先祖一般を指すのにも使われることも、彼らの記憶している系譜の世代が浅いことを示す。

8) Cf. Leopold Pospisil, "Law and Societal Structure among the Nunamiut Eskimo," In W.H. Goodenough (ed.), *Explorations in Cultural Anthropology*, New York: McGraw-Hill Comp., 1964, p. 399.

9) 家の名前を継いだり、父の名前を受け継いで自己の名前の一部に繰りこむのは、現在にいて過去をみるという点で遡行的といえる。これに対し、子供の名前をもって自分の名前的一部分とするのは、現在から未来へという点で前進的といえる。遡行的・前進的關係は、通時的な見方を基調とするが、これに対し現在の時点のみを問題とする共時的な関係がある。親族組織では、同世代間の関係においてあらわれる。

10) Floyd G. Lounsbury, "The Formal Analysis of Crow-and Omaha-Type Kinship Terminologies," In W.H. Goodenough (ed.), *ibid.*, p. 357.

Table 2 List of Kinship Terms

		Generation
1. anak	C	-1
2. bapa (pak)	f	+1
3. emak (mak)	m	+1
4. wah or bapa saudara	P <u>b</u>	+1
5. amoi or emak saudara	P <u>s</u>	+1
6. nénék (nék)	PP	+2
7. chuchu (chu)	CC	-2
8. monyéng	PPP	+3
9. chéchét (chét)	CCC	-3
10. bah	eS	0
11. adék	yS	0
12. adék-beradék or saudara	<u>S</u>	0
13. anak-buah	<u>SC</u>	-1
14. mentuha	MP	+1
15. menantu	<u>CM</u>	-1
16. ipar	MS/ <u>SM</u>	0
17. bisan	CMP	0
18. biras	MSM	0
19. laki	h	0
20. bini	w	0
21. madu	Co-wife	
22. tiri	Step relationship	
23. pupu	Consanguineal collateral degree of relationship	

C: child, P: parent, S: sibling, W: spouse, f: father, m: mother, b: brother, s: sister, h: husband, w: wife, y: younger, e: elder, /: and, or, Underlined: unbounded horizontal extension to all of ego's collateral consanguineals of the same generation (& sex) indicated

系譜関係にあらわれる「つながり」を表現するオラン・フルの「ことば」を表にしたのが、親族名称の表である。これは、主としてジョラッにおいて採集されたものである。話し手の性別・地位による「ことば」の相違がないので、話し手 (Ego) は誰でもよい。¹¹⁾

11) 以下、親族名称のなかで、呼び掛けに用いられる名称と、指し示す場合に用いられる名称とを区別して、前者を呼称、後者を示称とする。

1. 尊属親と同世代親

生まれてから結婚するまでは、生まれた核家族 (Family of Orientation) の中にとどまり、姻戚関係は生じない。さしあたり「自己」より上の世代の親族の名称法を考察しよう。

父母の呼び方は、別に変わったことはないが、フォーマルな席上で、よく ibu という語が発せられる。標準マレー語では「母」を指す語であるが、文脈から考えて、両親を意味している場合が多い。エンダウの町に近いラボン部落では、父も母も同じ語 wah と呼ばれ、特に性別の必要な時には、男と女とを意味する jantan と betina を各々 wah の後につける (wah jantan: 父 wah betina: 母)。呼称と示称とは同じである。



写真2 Nenek Pak Mangkok

父母の世代の親族は、性別によって名称が異なるのみで、他のマレー人のように、父母との相対年齢によって識別することはない。¹²⁾ また、父方と母方との親族は、名称の面のみならず、行動においても、まったく区別されない。従って、オジ名称は「直系型」といえる。ラボン部落では、他の部落でオジ名称である wah を両親に対して使っているので、オジ名称として、mamak を使っている。オバ名称は他の部落と同じ名称 (amoi) である。¹³⁾ このラボンでの親族名称の違いは、父、母、オジ名称だけなのであるが、今後さらにデータを補いたいと考えている。

他の世代に言及するときに明らかになるが、性別によって、世代を二分するのは、この両親の世代だけであり、他の世代では、男女の区別が問題にされない。オジ、オバ名称の一般的なものである wah と amoi との外に、bapa saudara (オジ), emak saudara (オバ) (saudara は「きょうだい」) も、時々用いられる。¹⁴⁾ しかし、クダー (Kedah)、ペラッ (Perak) などで用いられる penakan という語はまったく使われない。

祖父母の世代になると、男女の別も、直系と傍系とによる区別もなくなり、すべての親族が、

12) 形容詞をつけて、たとえば、「若い父」Pa'Oda として、父の弟を指すこともある。

13) ドウナイ部落のパティンは、2人の妻をもっている。彼と第1の妻は、ラボンの出身で、第2の妻は、ムントッロン出身である。第1妻の子供は、その両親を wah, オジを mamak と呼ぶ。第2妻の子供は、その両親を pak, emak と各々呼び、オジを wah と呼ぶ。各々の子供は、父の他の妻を amoi (オバ) と呼ぶ。

14) 標準マレー語の感覚からすると、「父のきょうだい」なのであるから、saudara bapa とする方が合理的なように思われるが、実際に saudara bapa とは言われない。オラン・フルの使うマレー語は、しばしば「名詞+修飾語」を「修飾語+名詞」として使う。例えば、kain borok (or burok) というのを、borok kain と言う。マレー人が、これは間違いだから、kain borok と言うのだと子供に教えても、依然として borok kain というのはなおらない。

nenek と称される。¹⁵⁾ この語は、同時に、年少者が、かけ離れた年令のもので、しかも部落で権威のある者を呼ぶのに、親族関係にこだわらずに、用いられることもある。曾祖父母の世代の親族は、すべて monyeng と呼ばれる。祖父母、曾祖父母名称は、両方ともに、漠然と祖先を指すのにも用いられる。曾祖父母より上の世代の尊属親に対する親族名称はほとんど言及されない。

きょうだい名称は、一般のマレー人が、兄と姉との区別 (abang/kakak)¹⁶⁾ をするのに対し、bah という彼ら特有の語で、兄姉を指す。弟妹は、マレー人と同じく、adek という一語ですましてしまう。マレー人の間では、兄一妹 (abang-adek) 名称を、夫婦の間でお互いを呼ぶ時に用いることがあるが、オラン・フルでは、このようなことはなく、個人名を呼び捨てにするだけである。配偶者の示称は、夫を laki, 妻を bini とする。きょうだい呼称 (bah/adek) は、広く傍系同世代親にまで拡張して用いられるが、尊属親と違い、同世代親間では、個人名が使われることが多い。兄姉に対しても、名前を呼び捨てにする。ことにテクノニムがあると、親族名称よりもテクノニムの方を日常用いる傾向が多くなる。

マレー語同様、性に関係なく、きょうだい全般を指す語 (adek-beradek または saudara) も使われる。この語は、(1)きょうだい、(2)きょうだいといとこ、(3)自分の親族、と拡張して用いられもする。

いとこの示称は、傍系の程度によって区別される。即ち、saudara se-pupu¹⁷⁾ は両親同志がきょうだいのもの、saudara dua-pupu¹⁷⁾ は祖父母同志がきょうだいのもの、saudara tiga-pupu¹⁷⁾ は、曾祖父同志がきょうだいのものを指し示す。第4イトコは、saudara empat-pupu¹⁷⁾ と言うことができるが、これはすでに親族の中には入れられない (身内でない人 lain orang または他所の人 orang dagang)。いとこの呼称は、前述したように、相対的年令によって、兄 (姉) または、弟 (妹) 名称を使う。従って、イトコ名称は、呼称において「ハワイ型」、示称において「エスキモー型」¹⁸⁾ といえる。

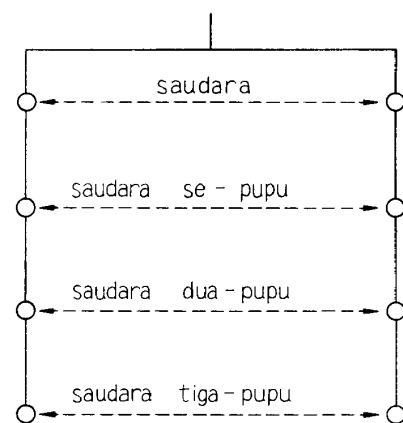


Fig. 4 Pupu-relationship

上記の pupu という語は、必ずしも同一世代のイトコに対してのみ使われるものではなく、異世代間の傍系の程度を示すのにも使われる。例えば、祖父の兄弟の息子は、自己にとって、

15) マレー人の間では、祖父と祖母とを区別することが多い。たとえば、ヌグリ・スンビランの datok と nenek, クダーの to'wan と tok など。

16) 東海岸地域では、kakak を兄に対しても用いる。オラン・フル は abang (兄) 名称を、姉に対しても用いる混同を犯すことがある。親族名称に限らず、オラン・フル以外の人間がいると、努めて標準 (あるいはジョホール) マレー語を使う傾向が見られる。その為に上記のような混同を起しがちである。

17) se-, dua-, tiga-, empat- は、各々 1, 2, 3, 4 を表わす数詞。

18) ただし、pupu の考え方によって、示称もハワイ型であるとも言えないこともない。

広義のオジ (wah) にあたるが、その遠さは、第2イトコ同様に dua-pupu である。一応、pupu の定義としては、「尊属の世代における、あるきょうだい関係を基線として、その基線からの世代の遠さによって計算される傍系血族の親等」をあらわすものとしておく。とくに、きょうだい関係に基線をもとめるとしたのは、彼らにあっては、ある一人の先祖からの出自をたどることによって、自己と他者との親縁関係を知るというのではなくて、自己の父母と他者の父母とは、いかなる関係にあったのか、どの世代の尊属親がきょうだい関係にあったのかということによって、親縁関係を知るからである。なお、この pupu という語は、姻族には決して用いられない。

2. 姻 族

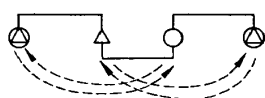
オラン・フルのように、父方、母方の親類を同等に取り扱う双系制の社会では、自己にとって姻族であるものは、下の世代のものから見れば血族にあたる。ということは、下の世代のものは、上の世代の婚姻選択の函数として、ある範囲の親族と結婚することを禁止されることになる。オラン・フルの社会では、婚姻の対象を選択する際に、両親に加えて、両親のきょうだい、即ち両親にとっては、各々の義理のきょうだい、が重要な発言力を持つことになる。婚姻規則は、きょうだい間インセストと、異世代間の通婚とが禁止されているだけで、どの「いとこ」も自由に婚姻しうる。とくに特別なイトコ婚を選好することもない。



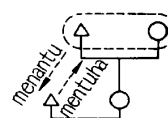
写真3 未来の夫婦2組

配偶者のきょうだいの示称は、ipar であるが、この語は、配偶者のイトコにまで適用される。呼称は、ipar か、あるいはきょうだい呼称(bah か adek)か、または誰その夫、妻(laki

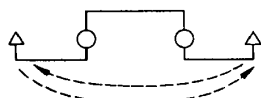
IPAR



MENTUHA/MENANTU



BIRAS



BISAN

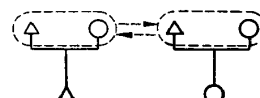


Fig. 5 Affinal Kinship Terminology

So-and-so, bini So-and-so) というように配偶者の名前をつけて呼ぶ。¹⁹⁾ 個人名を言うことは、嚴重に忌避される。二人称代名詞として、一般に用いられる hi より丁寧な aji が, ipar に対しては用いられる。²⁰⁾

自分と同世代で、婚姻によって生じる関係には、その他に bisan と biras とがある。bisan は、子供同志が結婚したときの、親同志の相互的な関係を指す。biras とは、きょうだいを娶ったもの同志の関係を指す。両方の関係とも、示称のみで、呼称としては用いられることはない。名前が直接呼ばれる。彼らの間には、いくらかの遠慮の態度が見られることもあるが、特に規制された態度を要求されることはない。

配偶者の両親は、mentuha と示称される。舅姑の区別は、pak mentuha, emak mentuha と言うように、父母名称を附加することによってなされる。舅と外舅、姑と外姑との別は、普通なされない。呼称は、父母呼称か、オジ・オバ呼称が、対象の性によって使われる。二人称代名詞は pak aji ないしは aji が使用される。mentuha のきょうだい、イトコも、mentuha のカテゴリーの中に入れられる。これに対し、自分の子供の配偶者を指すのに、menantu を用い、婿の場合は、menantu jantan, 嫁の場合は menantu betina と区別され得る。嫁婿に対しても、舅姑は aji という尊称を用いる。menantu の語を呼称としても用いるが、特に指名したい時には、アンドロニムか、テクノニムが用いられる。mentuha のカテゴリーが姻族の中で拡張して用いられるのに対応して、menantu のカテゴリーは、自分の子のみならず、子の世代のすべての血族の配偶者にまで拡張される。

mentuha-menantu および ipar 間の関係は、「遠慮をする」とか、「間を隔る」とかいった感じのもので、ことにそれは、当事者間で個人名を言うことの忌避ということによって制度化されている。²¹⁾ さらに、娘の婿（とくに長女の）に対しては、老後の扶養をはじめとして、種々の援助が期待される。これは、例えば、焼畑の後に植えた果樹の相続は、娘の間で均等にわけられ、息子達は、単にそのおすそわけを得る立場にあるということなどによっても、裏付けされている。

血族関係が、親密さ、くつろぎなどを特色とし、ときとして従順さを要求されるのに対し、配偶者の血族には、（相互的な）尊敬の態度ないしは遠慮の態度を期待される。姻戚関係は、新しい家族を作る夫婦にとって、血族以上に気をつかわねばならず、かつそれだけにオラン・

19) テクノニムと区別して、アンドロニム (andronym) と言えないこともない。cf. Claude Lévi-Strauss, *La Pensée Sauvage*. Paris: Plon, 1962. p. 256.

20) Aji は一種の尊称であるが、マレー人などの外来者に対してこの語を用いることはない。

21) 筆者のインタビューにおいては、夫婦の親類を知るために夫と妻と両方から各々の親族を聞き出さねばならなかった。しかし、配偶者の血族を知らないということはないのである。たとえば、ある字の書ける青年は、名前を忌避すべき姻族の名を言うわけにはいかないが、ローマ字で綴ってなら教えられると、さかんに m, a, n, g, k, o, k などと言ってくれた。なかには、この名前の忌避さえもあまり気にしなくなっている人も、出てきている。

フルの社会において重要な位置を占めている。血族であったものが、姻族になると、姻族名称、姻族関係が、血族のそれに優先する。しかし *mentuha-menantu*, *ipar* 間以外の関係にある親族は、都合の良い親族名称を採用して、それに見合った行動をとればよい。*menantu* 以外に、血族の配偶者を示す名称はないが、配偶者は日常生活では血族と殆ど同一視せられる。オジの配偶者は、オバ名称で呼ばれるといったように、血族の親族名称がそのまま拡張される。また、姻族の配偶者を示す名称も、*biras* 以外にはないが、姻族と同一視される。

3. 卑 属 親

卑属親名称は、尊属親のよりもいっそう簡単な、世代類別型になっていく。

自分の子供は、単に *anak* と称される。呼び掛けには、本名が使われることが多い。きょうだいの子、いとこの子は、一般に *anak-buah* といわれる。きょうだいの子は、*anak-buah bah*, *anak-buah adek* あるいは *anak-buah saudara* と詳しく言うこともできる。呼称には、*anak* が傍系親の子供にまで拡張されることもあるが、普通、*anak* は自分の子、他は *anak-buah* と使いわけする。一般的には、本名を呼び捨てにすることが多い。

子に対する財産の分割は均分を建て前としているが、女親のものは娘に、男親のものは息子に、と与えられることが多い。どの品物は、どの子供にという相続規定はない。

財産という程の財がないので、相続は場合に応じた状況主義で行なわれる。²²⁾ これに対する親の老後の扶養の義務もルーズである。親を扶養する第1の義務は、娘の夫、その次が息子たちあるいはきょうだいの子である。しかし、親は安楽椅子に坐って扶養されるのではなくて、働けるだけ働き、どうしてもできないことの援助を求めるだけであって、老後の生活にも、個人主義の考え方は浸透している。老人は、むしろ、娘、息子の世帯に寄生することなく、独立して生活を営むことが普通であり、また人々もそれを当然のことだと考える。



写真4 写真嫌いの子供を抱く父親

22) 相続の決定は、近親（配偶者、配偶者の親族代表、子供、きょうだい、両親、オジ・オバ、オイ・メイ）の相談によってなされる。あるインフォーマントによると、夫が死ぬと、娘があれば彼女が彼の財をとる。女の子は生計をたてるのが難しいからである。息子だけのときは、息子に行くが、この場合も生計をたてるのが難しいというので、末息子がもっとも権利を主張できる。妻が死ぬと、その財は妻のきょうだい・両親に行き、夫は権利を主張できない。なお、果樹の相続について、前項で触れたが、昔は、ドリアンなどの相続が多く行なわれていて重要であった。しかし、現在では、他の経済生活に追われて果樹栽培がおろそかになり、相続した果樹がないというケース、相続した果樹はあるが一度も収穫に行ったことがないというケースが多い。土地は概念上、すべてパティンのものとされ、相続の対象とはならない。しかし、焼畑にして、そこに作物を植えると、その収穫はすべて、その耕作者に所属することになる。

孫の世代になると、直系、傍系の区別が完全になくなり、単に chuchu という語によって孫の世代の全親族が称される。これは尊属の祖父母の代が、世代をひとまとめに類別してしまうのと対応している。孫の呼称は、示称を短くして、chu' と呼ぶか、本名を呼びすてにする。曾孫は、chechet で、孫と同様、世代類別型である。呼称は、短縮形の che(t) か、本名が用いられるという。

オラン・フルの間では、世代を数えるのに父—祖父—曾祖父……、あるいは、子—孫—曾孫……、というように世代を数えることもあるが、世代が離れると、順序もおかしくなり、実生活の上では、遠い世代は何の役割も果していないようである。彼らの親族の範囲は、無限に数えられるというのではない。上下の世代は、自己を中心に三世代位ずつまでが親族の中に数えられ、それ以上のものは、遠い親戚と言われることはあっても、普通、親族の中に入れられない。直系親族では、祖父母の生存しているものがごく少数で、曾祖父母はごく稀となる。従って、実際には曾祖父母より上の世代は、全然問題とされない。傍系親族も、第3 pupu というのは、祖父母のきょうだい関係が基線で、それ以上遠い pupu は非親族と見なされる。このように、直系上下三世代、傍系三親等 (pupu) までが親族の範囲とみてさしつかえないように思う。

実際には、(1)コミュニティの人口が比較的小さく、通婚圏が(自然的、社会的条件により)小さいので、同年輩の配偶者を選ぶためには、系譜上の世代関係を無視して、異世代間の婚姻も行なわれねばならなくなる。(2)このことは、次の世代にとっては、父母の世代以上の尊属親の再編成となって、世代の若返りが行なわれることになる。²³⁾ (3)父方、母方の両方から系譜をたどることによって、より近い関係の親族名称を選択できる。(4)姻族を擬似血族として、血族名称でもって呼称する。(5)テクノニミーの慣行と、親族名称の世代類別性によって、親族関係の混同がなされ、実際の系譜をたどることが困難になり、単に近い親類——即ち完全に系譜のたどれる間柄——、遠い親類——即ちはっきりとどんな間柄かは知らぬが、自分の親と他者の親とが親類であったから、自分と他者とも親類であろうと推定する位の間柄——にわけられるにすぎないようになってくる。このような種々の条件によって、曾祖父母の上の世代まで系譜をたどらなくとも、十分の親族範囲が得られるのである。

4. 本名とテクノニム

子供が生まれて、しばらく月日がたつと、子供の名前が確定してくる。特に名付けの式ではなく、名付け親も決まっていない。姓はなく、名だけである。これを nama betul (真の名、本名) と呼ぶ。しかし、大病をしたりすると、回復後新しい本名ととりかえる。この本名の外に、通称、あだ名ともいうべき、nama gelar があるが、これは誰でも持っているものではない。

23) Cf. Raymond Firth, *Essays on Social Organization and Values*. London School of Economics Monographs on Social Anthropology, No. 28, University of London, 1964. p. 121.

い。この他に, nama anak 即ち子供の名をもって親を呼ぶ慣行がある。子供の名が Kachin とすると, 父親は, 「カチンの父」(Pak Kachin), 母親は, 「カチンの母」(Mak Kachin) と呼ばれる。但し, 子供が誕生して後すぐにテクノニムが使用されるのではなく, 一定の期間を経て(大丈夫この子は育つと見きわめて) からテクノニムが採用される。そのテクノニムまでの期間, 通称のように, 子供が男であれば Pak Eweng (父), Mak Eweng (母), 女の子であれば, Pak Deyeng, Mak Deyeng と呼ばれることもある。Eweng, Deyeng は各々男の子, 女の子という意味であろう。子供が7,8才にもなっているのに, 本名で呼ぶと, 相手に失礼であるといわれる。

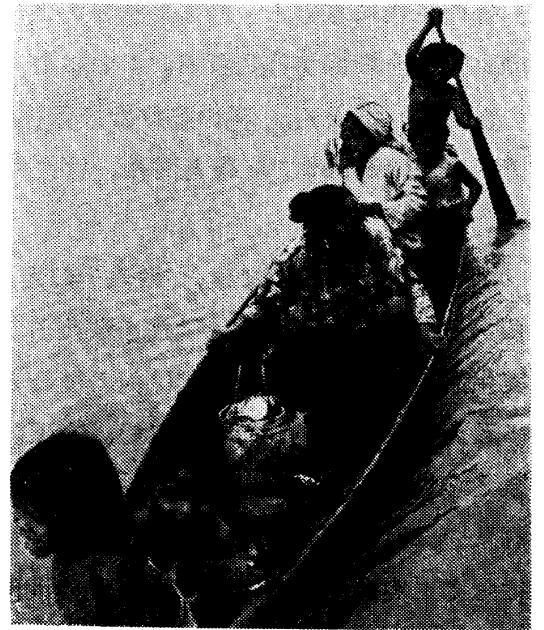


写真5 丸太舟に乗って隣の部落へ向う従姉妹とその娘たち

テクノニムが本格的に使われだすと, 本名は忘れられていき, 以後本名が, 一般に思い出されるということとはなくなる。従って, 子孫は尊属の本名を知らないままに過ごすことが多い。なお, 実子以外の子供の名を名祖(エポニム)として採用することは決してない。²⁴⁾ Pak Awang という男と Mak Ken という女が再婚しても, そのテクノニムはそのまま続く。また養子(anak angkat) 縁組をしても, 養子の名は名祖とはなり得ない。

長子が死んだときは, mantai という称号が与えられる。この称号は死後5～6年続き, もし他に子供ができればその子で呼ぶことができる。但し, 子供が結婚して子を残す程大きくなってから死んだ場合には, その子の名がすぐにやめられるということではなく, そのまま継続されて, mantai という称号も使われない。mantai が一種の死名(death-name or necronym)の残存であるかも知れないが, 現在のオラン・フルの社会では, mantai というのは, 結婚による地位を指す特殊な名称, 即ち「子供をもっていない夫婦」の意味に近いカテゴリーと考える方が妥当なようである。また, 実際に子供のずっとうまれていない夫婦をも mantai と呼ぶ。Needham がボルネオのプナン族について報告したような²⁵⁾, 複雑なネクロニム・システムは存在していない。mantai 以外にネクロニムと言えるものは, 配偶者の死んだ時に用いられる称号(balu)のみである。

24) ボルネオの陸ダヤック族では, テクノニムは, 種々の親族, 時には, 親族でないものまでを称するのに用いられる。W.R. Geddes, *The Land Dayak of Sarawak*. Colonial Research Studies, No. 14, London: 1954. p. 17.

25) Rodney Needham, "The System of Teknonymy and Death-names of the Penan," *South-western Journal of Anthropology*, Vol. 10, pp. 416-431.

次に孫ができると、孫の名前が、子供の名前にとってかわって名祖となる (nama chuchu 孫名)。即ち、孫が Kotoi という名であれば、その祖父母は、Kotoi の祖父または祖母 (Nenek Kotoi) と呼ばれる。普通最初に生まれた子または孫の名前が名祖として採用されるが、もし彼らが身ぢかにいず、遠くに離れて暮している時には、身ぢかにいる子や孫の名前が採用される。

孫の名にしても、子の名にしても、呼ぶ者にとって、その名祖となっている孫あるいは子が、義理のきょうだいや両親であると、その名を使ったテクノニムも使うことができない。これは前述したように、姻族関係には名前の忌避があるからである。

曾孫の名前を用いる例はない。

E.B. Tylor は、テクノニミーの慣行を、妻方居住婚と、義理の息子の忌避とに結びつけて考えた²⁶⁾。彼は、テクノニミーを行なう社会と後二者の慣習をもつ社会とを、各々別個に相関をもとめ、両者ともかなり高い相関がテクノニミーに対して見られることを発見した。そこで、入り婿として入ってきた夫が、子供が生まれるまでは家族のメンバーとして認められないで、子供の生誕によって初めて家族の一員として認められるようになることを示すものが、テクノニミーであるという風に解釈した。²⁷⁾ タイラーの推論は、方法論的にも問題があるが、単にその結論を取りあげても、オラン・フルの社会には当てはまらないことは確かである。オラン・フルの社会では、結婚当初、妻方居住婚を行なうが、1年後には夫方居住、さらに1年後には独立居住となるのが理想型であって、現実にはテクノニミーの行なわれる頃には、妻の親族とは住居を共にしていない。また、義子―義母間の忌避関係もパターン化されたものとしては認められない。²⁸⁾

タイラーに対し、R. Lowie は、テクノニミーを個々の社会の特定の条件に照らしあわせて解明すべきだとし、通社会的な類似性は、入念な研究によって、不可とされるものがほとんどであるという。²⁹⁾ そして、アンダマン島人などの三つの社会の例をあげて、それぞれの社会でテクノニミーが果たす役割の違いを指摘している。結論として、この三つの社会で慣行されているテクノニミーは、たまたま一つの共通の名前で呼ばれてはいるが、それは便宜的なもので、三つの異なる習慣とでも言えるとする。

ロウイーのように、テクノニミーが、全社会を通じて、ある共通の機能を果しているのでは

26) Edward B. Tylor, "On a Method of Investigating the Development of Institution: Applied to Laws of Marriage and Descent," *Jour. of the Royal Anthropological Institute*, Vol. 18 (1889), pp. 245-269.

27) E.B. Tylor, *op. cit.*, pp. 248-249.

28) オラン・フルでの姻族の名前の忌避は、性的な競合や、インセストに対する病的恐怖の態度から出たものではなく、むしろ姻族との結合関係強化のためであろう。

29) Robert H. Lowie, *Primitive Society*. New York: Liveright Publishing Corporation, 1947. p. 109, pp. 433-434.

ないということは正しいかも知れない。しかし、テクノニミーが、すべての異なる社会で、異なる機能を持つとは言えないのではなかろうか。テクノニミーを同じような機能のもとに慣行する幾つかの社会が、分類され得るに違いなく、その分類に基づいて類型間の相似を求めることも、一つの方法であろう。

構造から見て、テクノニミーが（もし、例外なく、一つの社会のすべての人がテクノニムを本名と代置するならば）年令階梯を示すことは明らかである。即ち、世代によって、子、親、祖父母の年令階梯にあるものは、そのテクノニムによって一目瞭然となり、一種の社会の横断的枠組となっている。これは推移儀礼にも比せられるもので、人の一生における、ある時期の生活局面における地位を明確にしているとも解釈し得る。

オラン・フルの年令階梯に関する区分は、彼らのことばにも見られる。即ち、第1期の未成熟の子供は *ngkenek* と称される。これは独立の仕事ができない子供達をさし、しばしば、この時期の子供を（実子でも）呼ぶのに、本名を呼ばずに、*ngkenek* と呼びすてる。大体12,3才位までの子供である。お腹の中にいる子供まで *ngkenek* と呼ぶ。自分自身で独立の生活の糧を得られる程、働ける時期になると、*dara* と称される。この語は、呼称には使われない。ほぼ13才位から18才位までの未婚の男女を含める。もし、結婚適令期が過ぎても長く婚姻しないものがあると、*bujang* と呼ばれる。これは、単身生活者という意味である。第3期の既婚男女は、子、孫の名などによって、世代区分されることになる。同時に、子供の名前を共通にすることによって、夫婦という単位が明確にされる。父一母一子という関係がテクノニムによって一目瞭然となり、常に夫婦一組が社会の単位となるこの社会の構造とよく一致する。祖父母の代になると、祖父一祖母という区別もなくなり、夫婦そのものが完全に一つのものになってしまうことになる。この人生の第3期にあって、例外的な男女、即ち、離婚、死別したもの、子供をなくしたもの、などは、また別の称号で区別されることになる。あるいは、孫を持つ世代にあるのに、孫がない時は、「～の父で祖父の世代にある人」*Nenek Pak~* という風に呼ばれる。³⁰⁾ 但し、このオラン・フルでの年令階梯は、明確な自治集団ではなくて、一種の（水平的）構造的枠組を社会に与えているに過ぎない。

社会の年令階梯化ということの外に、個人の名前が、非人格な地位の連続（子一親一祖父）によって置き換えられることによって、傍系親族関係を消してしまうことが、テクノニミーの機能としてあげられる。³¹⁾ このことは、非常に世代類別傾向の強い親族名称に、直系原理の枠組を与える役割を果す。前述した枠組が水平的分化を示すのに対し、垂直的分化をも同時に示

30) マレー人(クダー)の間では、個人名の前に親族名称をつけて、相手の地位をはっきりさせる習慣がある。これは、実際の系譜関係に基づくものではなく、単に、相対的年令、社会的地位が考慮されるだけである。

31) Hildred and Clifford Geertz, "Teknonymy in Bali: Parenthood, Age-grading and Genealogical Amnesia," *Jour. of the Royal Anthropological Institute*, Vol. 94, pp. 94-108.

している。³²⁾

さらに、このテクノニムを、necronyme (死名), autononyme (個人名), andronyme (配偶者名) などと関連させて、「構造的な」関係を見ようとする見方もできよう。³³⁾ C. Lévi-Strauss は、Needham の報告した Penan 族 (ボルネオ) のネクロニムから出発して、人々が死んだ者の名前を言及しないということが、ネクロニムの構造を説明するとし、テクノニムについては、子供が生まれて、その子で両親が呼ばれねばならぬようになることが、とりもなおさず、両親が「死んだ」ものとして扱われたことを示し、出産が、新しい存在による古いものの代置と考えられていることを示す、とする。³⁴⁾

オラン・フルに関しては、死んだ者の名前を呼ぶのを禁止することはない。前述したように名前の忌避は姻族間にのみ行なわれる。しかし、事実を無視してレヴィ＝ストロースのような仮定を立てて考えると、テクノニムのみならず、姻族間の名前の忌避も説明できて便利なのは便利である。古く、J. G. Frazer はテクノニミーの起源を、本名を口に出して言うのが嫌だという心理的な事実によって説明している。³⁵⁾ テクノニミーが、何らかの名前の忌避に関わっていることは事実であろう。

また、レヴィ＝ストロースは、テクノニムやネクロニムを、termes «relationales» とし、個人名が、単に «自己» を他の «自己» から区別するだけのものであるのに対比させている。そして、テクノニムが、関係を示す語 (親族名称) と個人名からなっているのに対し、ネクロニムが、関係を示す語だけでなっているのに着目して、テクノニムを、relation à un soi autre, ネクロニムを、relation autre と簡単に割切ってしまう。これは各名称法の構成の分析から言えば極めて正しい言い方であるが、前述したごとくテクノニムの水平的分化作用を考えると、テクノニムを単に彼のように捉えるのは、全体の社会構造を見落す危険があるように思う。

最後に、テクノニミーの慣行によって、系譜関係が忘れられて³⁶⁾、多くの親族関係が、漠然とした推定に基づいていることを指摘したい。これは、彼らに適行的思考をあきらめさせ、常に現在の世界で物事を見ることを強いる。同時に、繰り返すようであるが、世代類別的な親族名称に、直系的なつながりを強化し、漠然とした関係にある傍系親族を、親族の範囲内から、はじき出すことになる。

32) 陸ダヤッでは、必ずしもこの垂直的分化の機能があてはまらない。W.R. Geddes, *ibid.*

33) Claude Lévi-Strauss, *op. cit.*, pp. 253-265.

34) Claude Lévi-Strauss, *op. cit.*, pp. 257-258.

35) James G. Frazer, *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*. Abridged edition in 2 vols. London: Macmillan & Co. Ltd., 1957. Vol. 1, p. 327.

36) Geertz 夫妻は、「構造的な系譜関係の健忘症」と呼ぶ。Hildred & Clifford Geertz, *ibid.*

4 むすび—彼らの社会の見方

最後に、彼らの社会のモデルとして、一人のオラン・フルを中心とした幾つかの同心円的な構造を指摘して、本論のしめくくりとしたい。

(1) 核家族——生まれた家族にしろ、結婚して作った家族にしろ、常に個人の第1の壁を形成するのは、核家族である。一組の夫婦からなる家族を *se-kelamin* と称し、必ず独立の生計を営んで、一つの世帯をなしているものである。この世帯の中に、核家族以外の親族がくりこまれているのは、全体の14%強を示すが、その親族の多くは、永久的世帯共同者ではない。

(2) この核家族をめぐって、結婚、葬式、相続などに必ず参与する近親の縁者 *waris* がある。これは、核親族とも言うべきもので、父母、オジ、オバ、きょうだい、子、オイ、メイがこれにあたる。夫と妻との各々の *waris* は厳然と区別されて交わることはないが、配偶者の *waris* が、とくに重要な意味をもっていることは、姻族に対する親族名称の項で述べた通りである。この場合、姻族が、あたかも血縁のように取り扱われ、夫と妻との *waris* が二つ、ひっついて、一つの同心円をなす。

(3) 直系三親等、傍系第三イトコまでの範囲の親族。この場合も、夫婦それぞれの親族が重なって、大きな同心円となる。

(4) 上記の三つが、血縁による限定なのに対し、ここで初めて、地縁によって同心円を描くことになる。即ち、部落である。もちろん部落の範囲によって、核親族や親族を縦断してしまうことが多い。ことに親族全体が一つの部落の中にいるということは、理論的にも不可能なことである。しかし、このモデルを一つの行動規範として考えるとき、常に部落の方が、親族の外円をなしているとするのは正しい。部落は、親族と違い、種々な異質なものを容易に受け入れる開いた集団であるので、親族内部でよりも、対人関係に相違がつけられる。但し、理念的には、一つの部落は親族の集まりであると言われる。

(5) エンダウ川流域のオラン・フルのコミュニティ。これは、部落連合といったものではない。彼らの意識の間で、一つの川に住む者は、みんな親類なのだ、ということがあり、かつ、部落相互間の接触交渉が、他のコミュニティよりも全体として頻繁であるからである。

(6) オラン・フルの社会。奥地に住み、貧しい生活に追われている同類の民。必ずしもイスラームに改宗していない者という条件はつかない。

(7) 非オラン・フルの世界。マレー人、中国人、インド人など、彼らの搾取者の世界である。

この同心円的構造の上に、超自然的秩序の世界が垂直的に組みたてられ、全体としてのモデルが、彼らに行為の決定をするための、文化的格律を示すことになる。

主要参考文献

- Conklin, Harold C. "Ethnogenealogical Method," In W.H. Goodenough (ed.), *Explorations in Cultural Anthropology*. New York: MacGraw-Hill, 1964, pp. 25-55.
- Firth, Raymond. *Essays on Social Organization and Values*. London School of Economics Monographs on Social Anthropology, No. 28, University of London, 1964.
- Freeman, J.D. "On the Concept of Kindred," *Jour. of the Royal Anthropological Institute*, Vol. 91 (1961), pp. 192-220.
- Geddes, W.R. *The Land Dayak of Sarawak*. Colonial Research Studies, No. 14, London: 1954.
- Geertz, Hildred and Clifford. "Teknonymy in Bali: Parenthood, Age-grading and Genealogical Amnesia," *Jour. of the Royal Anthropological Institute*, Vol. 94 (1964), pp. 94-108.
- Goodenough, Ward H. "Yankee Kinship Terminology : A Problem in Componential Analysis," *American Anthropologist*, Vol. 67 (1965), pp. 259-287.
- Lévi-Strauss, Claude. *Anthropologie Structurale*. Paris : Plon, 1958.
- *La Pensée Sauvage*. Paris: Plon, 1962.
- The Future of Kinship Studies, *Proceedings of the Royal Anthropological Institute for 1965* (1966), pp. 13-22.
- Logan, James Richardson. "The Orang Binua of Johore," *Jour. of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Vol. 1 (1847), pp. 232-293.
- Lowie, Robert H. *Primitive Society*. New York : Liveright Publishing Corporation, 1947.
- Mitchell, William E. "Theoretical Problems in the Concept of Kindred," *American Anthropologist*, Vol. 65 (1963), pp. 343-353.
- Murdock, George Peter. *Social Structure in Southeast Asia*. Viking Publications in Anthropology, No. 29, New York: 1960.
- Needham, Rodney. "The System of Teknonymy and Death-names of the Penan," *South-western Jour. of Anthropology*, Vol. 10 (1954), pp. 416-431.
- Ross, A.N. "A Benua Vocabulary from Ulu Endau, Johore," *Jour. of the Federated Malay States Museums*, Vol. 15 (1939), pp. 164-169.
- Schneider, D.M. "American Kin Terms and Terms for Kinsmen : A Critique of Goodenough's Componential Analysis of Yankee Kinship Terminology," *American Anthropologist*, Vol. 67 (1965), pp. 288-308.
- Tylor, Edward B. "On a Method of Investigating the Development of Institution : Applied to Laws of Marriage and Descent," *Jour. of the Royal Anthropological Institute*, Vol. 18 (1889), pp. 245-269.
- Ward, Barbara E. "Varieties of the Conscious Model, the Fishermen of South China," In M. Gluckman & F. Eggan (ed.), *The Relevance of Models for Social Anthropology*. London: 1965, pp. 113-137.
- "Sociological Self-awareness : Some Uses of the Conscious Models," *Man* (N.S.), Vol. 1 (1966), pp. 201-215.